

大東市歴史民俗資料館
資料館
(大東市)

みゅ〜
ザ・見遊じあむ

リニューアルで館内の展示を一新した大東市の歴史民俗資料館の内部



37

9月にリニューアルして化粧直し

大東市歴史民俗資料館は、この9月にリニューアルし、装いも新たにオープンしました。大東市総合文化センターの1階にある資料館は、大東市域にある歴史資料、考古資料、民俗資料などを収集し、いろいろな資料の展示や調査、研究を行い、文化財の保護

に役立てようとするための施設です。大東市は縄文から弥生時代の地域から多くの土器や古墳が発掘されています。全国的にもめずらしい、井戸の戸口装置も発見されています。飛鳥時代には河内湖から広見池となり、奈良・平安から鎌倉時代にかけて

は地域の東側、生駒山麓を縦断する東高野街道が京から河内を抜けて高野山へ向かう幹線道路として広く利用されました。展示室のスペースは決して広くはありませんが、各時代ごとに年表と図表を新しいパネルにして、効率よく展示されています。市域

にある野崎まいるのようすも描かれた「河内名所図会」や戦国時代の武将の書簡も展示されていました。資料館では学習会や講習会も行われ、市民が参加して郷土の歴史、文化遺産に対する理解と認識を深めていく施設でもあります。昨年、貴重な文化遺産だった平野屋新田会所跡が取り壊されてしまったのが残念です。市の文化遺産への姿勢が問われます。

ミュージアムメモ

▶所在地/〒574-0037大東市新町13-30 大東市総合文化センター1階▶交通/JR住道駅下車、徒歩10分▶開館時間/9時~17時30分▶休館日/第1、第3月曜日(その日が休日のときはその翌日)、年末年始(12月30日から1月4日)▶入館料/無料です▶問い合わせ/☎072-873-3521

「トウキョウソナタ」



どこにでも起こる
家庭崩壊の不安

この映画のキャッチコピーは「ボクんち、不協和音」。ある4人家族の家庭。夫は会社をリストラされ、だが家族には言えず、いつものように家を出る。長男は家族に相談もせずにアメリカの軍隊の入隊試験を受ける。次男は学校の給食費を家族に内緒でピアノを習うためにそのレッスン代に回してしまう。妻はせっかく作ったドーナツも食べてもらえない。食卓を囲んでいる間、何だかチグハグで、いつの間にかそれぞれが勝手な方向に向かってただの同居人になっていった家族。

ごく普通の4人家族がたどる崩壊からさきずなを取り戻していく姿を描いた人間ドラマです。リストラを家族に言えない夫を香川照之、その妻役に小泉今日子、そして役所広司などの役者が脇を固め、日本の家庭が持っている社会問題を、緊迫感とサスペンスタッチで描いていきます。強盗に押し入れられて妻が人質となって車で逃走する場面から急転回します。ちょっと強引なストーリー展開にも感じますが、ラストシーンで演奏されるドビュッシーの「月の光」に注目です。

「一見どんなにバラバラな家族でも、どんなに苦しくひき返せない日常でも、希望は捨ててはけない」。そんなメッセージが伝わってきます。監督は黒沢清。ミニシアター系でしか上映してないのが残念です。「ソナタ」とはイタリア語で「数人で演奏されるもの」。奏鳴曲(そらうめいきょく)と訳されています。まさに家族の奏鳴曲でしょうか。

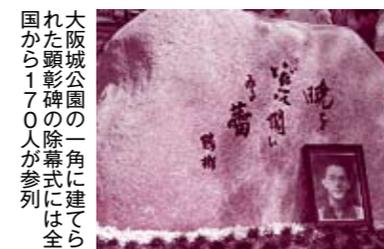
このシネマ

大阪の戦跡を歩く

大阪の戦跡を歩く

第36歩

反戦の川柳人・鶴彬の顕彰碑が完成
(大阪市中央区)



暁をいだいて闇にゐる蕾

鶴彬(つるあきら)は1909年1月1日に生まれ、日本のプロレタリア文学の影響を強くうけた代表的な反戦川柳作家です。現在の石川県かほく市に生まれ、本名は喜多一二(きたかつじ)。大阪で工場労働者として働き、上京して川柳の同人誌に入り、プロレタリア川柳を提唱。徴兵によって軍隊にはいますが、治安維持法違反で、当時の大阪城内にあ

った大阪衛戍監獄に収監されました。1938年収監中に病死。「俺達の血にいろどつた世界地図」「フジヤマとサクラの国の餓死ニュース」「手と足をもいだ丸太にしてかへし」などの作品が知られています。この9月14日、ゆかりの地に顕彰碑が建てられました。石に刻まれた句は見出しに。いま、神山征二郎監督による鶴彬を描いた劇映画が製作中です。

撰津河内和泉三國誌

37 (大阪市)

道頓堀の水路開発と安井一族

阪神タイガースが優勝したときに、熱狂して暴走したファンが飛び込む場所として、全国に知られているのが道頓堀。道頓堀は大阪市の湾岸部・西側を流れる木津川と、東横堀川を結ぶ全長約2・5kmの運河であり、また一方で、ミナミの歓楽街の町名でもあります。「道頓堀ブルース」や「とんぼり人情」など、大阪を舞台にした歌謡曲にも定番で登場します。



道頓堀の東側の一角にある大きな碑

この道頓堀の事業につくした人として、安井道頓(やすいどうとん)と安井道ト(やすいどうぼく)がよく知られており、通りの東側、日本橋北詰に3メートル近い大きな「安井道頓・道ト紀功碑」が建っています。安井道頓は1582年ごろ、豊臣秀吉から大

坂城の外壕を掘削した功勞などで、城南の地を拝領しました。1612年、豊臣家の要請を受けて、私財を投じて城南地域中心部の水路(後の道頓堀)の整備を手がけました。その中途の1615年に大坂夏の陣に巻き込まれ、秀吉の遺児の豊臣秀頼に味方して入城し大坂城内で討死しました。水路の事業は、道頓の死後、大坂城に入った松平忠明の許可を受けて、道頓の従兄弟の安井道トや、平野郷の平野藤次(安藤藤次)らが跡を継ぎ、同年11月について東横堀川から木津川に通じる水路を完成させました。松平忠明は安井道頓らの功績を評価して道頓堀と名づけたといわれます。1660年代の元禄期からこの界隈に芝居小屋ができたのは、「道頓堀五座」と呼ばれた中座、角座、浪花座、弁天座、朝日座などで歌舞伎や人形浄瑠璃が演じられ賑わいました。千日前の三津寺墓地に安井道頓の墓があります。

いまも心に響く
名詩・名歌・名語録

「落葉」
秋の日の ヴィオロンの ためいきの
身にしみて ひたぶるに うら悲し
ヴェルレーヌ

この詩の第2節以降は「鐘のおとに胸ふたぎ/色かえて涙ぐむ/過ぎし日のおもいでや/げにわれは/うらぶれてここかしこ/さだめなく飛び散らふ落ち葉かな」。上田敏訳。作者のポール・ヴェルレーヌ(1844~1896)は、ステファヌ・マラルメ、アルチュール・ランボーらとともに、フランス象徴派を代表する詩人。多彩な韻を踏んだ約540篇の詩の中に、絶唱とされる作品を含みながら、その人生は破滅的でした。「落葉」とともに「巷に雨の降るごとく……」がよく知られています。

奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の
こえきくときぞ秋はかなしき

猿丸太夫

猿丸太夫(ざるまるだゆう、生没年不詳)は、三十六歌仙の一人。猿丸は名、太夫は官位を表しています。平安時代初期の元明天皇時代、または元慶年間ごろの人物とも言われていますが、本当に実在した人物かどうかすら不明の、謎にみちた人物といわれています。異説として猿丸太夫=柿本人麻呂説がありますが、空想の域を出ていません。全国各地に伝承の地があります。この歌は「百人一首」のなかのひとつでよく知られています。紅葉に鹿のとりあわせはこの歌からきています。